様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｈ０２６８８

研究課題名（和文）国際教育プログラムの開発・普及・評価サイクルの構築：高大連携による学びの実質化

研究課題名（英文）Development of a cycle for designing, distributing, and evaluating international education programs: Quality improvement through collaboration between secondary and higher education

研究代表者
堀江　未来（Horie, Miki）

立命館大学・国際教育推進機構・教授

研究者番号：７０３７７７６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,800,000円

研究成果の概要（和文）：教育のグローバル化に伴い急速に拡大する国際教育実践において、知識獲得と異文化体験学習を組み合わせた国際教育プログラムの開発・実施・評価・質保証のサイクルを教育現場で担う人材育成が課題である。本研究では、異文化体験学習関連理論を多面的・批判的に検証し、理論的基盤を整理したのち、高校・大学で国際教育実践を担う人材育成のためのワークショップの開発を行った。開発過程においては、毎年、設計・実施・検証を繰り返すとともに、現場のニーズ調査等を通して、複数のモジュールから構成されるワークショップを完成させた。今後、ワークショップの開催や書籍化によって、社会に広く普及させる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、理論研究と現場での実践を往復しつつ、国際教育実践現場を担う人材育成に寄与するワークショップを開発した。このワークショップでは、異文化感受性の育成、すなわち、社会におけるダイバーシティ・インクルージョンを牽引できる人材の育成を、国際教育の究極の目的と捉えている。国際移動を伴うかどうかにかかわらず、「異文化体験から学ぶ」という現象を、理論的枠組みをもって整理し、現場の教育実践者にとっても理解しやすく、実践しやすい汎用性の高い形にまとめることができたこと、そして、教育実践者自身が継続的に異文化感受性を高める必要性の理解を促進できたことは、本研究の大きな社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：As a scale of international education practices rapidly expanded for the sake of globalization, one of the challenges at schools in Japan is a lack of international education practitioners capable of designing, operating, and evaluating programs that are theoretically reasonable, feasible for practitioners, and meaningful for leaners. We critically examined various theories and conceptual frameworks relevant to intercultural learning and personal growth and created a set of modules as a professional training workshop for international education practitioners. We went through a process of designing, operating and getting feedback from participants every year in order to improve the quality and feasibility of the workshop as well as conducting survey to understand the real voices of international education practitioners. We will continue offering this workshop regularly and also publish a self-study guidebook which illustrates the learning process offered by the workshop.

研究分野：国際教育

キーワード：国際教育　異文化感受性　異文化教育　ワークショップ開発　SGU　SGH　グローバル人材

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、国際化施策（「スーパーグローバル大学創設支援事業」（SGU）及び「スーパーハイスクール事業」（SGH）等）により、高等教育機関や高等学校の国際化が急速に推し進められる中、正課内外において多様な国際教育プログラムが展開されるようになった。これらグローバル人材育成を主眼とする教育実践で目指すものは、語学力や知識の獲得よりも、むしろ異文化対応力や多様性理解、自主性の涵養、柔軟性や多面的な視点の獲得など、非知識型の能力・資質である（経済産業省 2010 他）。そして、これら既存の国際教育プログラムの多くは、海外渡航や外国人留学生との交流といった異文化接触機会を提供する形をとっているが、実際、そこには具体的な学習目標設定や包括的なラーニングデザイン、つまり学びの質を保証する理論的基盤が必ずしも存在していなかった。つまり、本研究課題開始時においては、国際教育が急激に拡大する現場で、理論的基盤に基づいたプログラム開発や質保証を前提とした評価の仕組み、及びそのプロセスを現場において担うことのできる教員や実務担当者の養成を含めた一連のプロセスの構築が求められていた。

理論的基盤に基づく国際教育プログラム開発の例として、ミネソタ大学（アメリカ）で開発された教材「Maximizing Study Abroad」（Paige, et. Al. 2002）の分析が、本研究にとっての出発点となった。海外留学中の異文化体験における「学びの技術」を身につけさせる仕組みを提供するため、この教材では、異文化間能力の発達が認知面だけでなく情緒面及び行動面も含めた変容を前提とし(Bennett, 1993)、また多様な価値観や行動様式の直接経験を学びの刺激としながら(Paige, 1993)、異文化間能力（Hammer, 2013; Verg, et al. 2013 他）を高めることを意図している。一方、メルボルン大学（オーストラリア）を中心として執筆された「Finding Common Grounds」（Arkoudis, et al. 2010）では、国内学生と国際学生の交流に関する実証研究に基づき、「学びのある交流」の仕組みづくりを提案していた。これらのモデルに即した国際教育プログラムの実践例が名古屋大学、立命館大学、立命館アジア太平洋大学など日本でもいくつか見受けられた（堀江, 2009 他）が、汎用性の高い形での実用化には至っていなかった。また、同様の趣旨で日本においても「多文化間共修」を促進しようとする動きも始まっていた（坂本・堀江・米澤 2017）。

２．研究の目的

本研究は、日本の高校・大学における国際教育実践の質向上に資するため、以下の３点を目的として行った。

(1) 異文化体験学習関連諸理論に基づくアクティブ・ラーニング型国際教育プログラムの開発
(2) 高校・大学の実践現場における実証的な評価研究を通してのプログラム実用化・実装化
(3) プログラムを有効に活用できる人材育成機会及び開発・普及・評価パッケージの社会への発信・普及

また、プログラム開発の具体的な文脈として、①国内・国際学生の交流機会における異文化体験を学びにつなげる、②海外留学における異文化体験を学びにつなげる、③異文化体験学習をキャリアプランニングにつなげる、の３つのテーマを想定した。

３．研究の方法

(1) 理論的枠組みの検討

- 異文化体験を通じた生徒・学生の成長のメカニズムに関する理論研究を多面的に行い、その上で異文化体験における学びを促す仕組みに関する理論の整理を行った。具体的には、異文化間能力論、体験学習理論、成長発達理論、グローバルキャリア形成論などの近年の展開をあらためて概観し、欧米を中心としてこれまで発達してきた理論的枠組みを多様な視点から批判的に考察し、日本の文脈での適用可能性について検討した。
- 異文化感受性発達理論については、Akiko Maeker 博士（Interculturalist, LLC）の協力の元、概念理解を深めると同時に実践的な解釈や取り組みの具体的方策について検討した。

(2) 国際教育ファシリテーター養成のためのワークショップ・教材の開発

- 上記理論研究に基づき、研究期間の 3 年にわたって国際教育に携わる人を対象にワークショップを設計・実施し、成果を検証するとともに、改善を行った。本ワークショップについて、自己学習教材として書き起こし、書籍化を進めている。
- 高校生・大学生向けワークショップを設計・実施し、成果を検証するとともに、改善を行った。今後、これらの内容に基づく自己学習用教材の開発を進める。

(3) 日本の大学・高校の国際教育実践現場における課題・ニーズ・成功事例に関する調査・分析

- SGU/SGH 校における国際教育プログラム実践の実情を調査し、現場の課題やニーズを抽

出し、分析した。

- 国内外における先進例を調査し、生徒・学生の学びが促進される要因・要素を抽出する予定であったが、優先順位により、この点については十分行えなかった。

４．研究成果

本研究の成果は、大きく以下の２点にまとめられる。

第一に、国際教育ファシリテーター養成ためのワークショップ・教材を開発したことである。具体的には、「異文化体験から学ぶ」ことに関連する多様な関連理論の検討を基盤とし、高校や大学などで国際教育に携わる教職員を対象に、1 日～２日間の「国際教育の理論と実践を学ぶワークショップ」を計７回にわたって開発・実施・検証した（2017 年 12 月 2 日、12 月 10 日、2018 年 9 月 5-6 日、10 月 17 日、11 月 7 日、11 月 10-11 日、2019 年 10 月 16-17 日）。講師は、本研究チームのメンバーで分担して行った。内容は、①イントロダクションとアイスブレーキング、②理論編、③実践編で構成される。

理論編では、「異文化教育体験から学ぶとは？」(Paige 1993, Hammer 2012, 他)「国際教育における学習者の学びを促す仕掛けづくり」(Kolb 1986, Rogers 2001, Coulson & Harvery 2013, 他)「多文化間共修のねらいと仕組み」(Allport 1954, 他)のテーマで、実践場面とのリンクを意識しながら、理論を紹介し、参加者間の議論を通じて学びあいの中で理解が深まるよう工夫した。

理論編に続く実践編では、「グラウンドルール作りの手法と体験」「海外留学の学びとプログラミング」「学びの振り返り」というテーマで、それぞれに参加者がグループワークを通じて学びあう仕組みを作った。なお、グループワークのテーマは毎回新たなものを開発し、実践した。例えば、「人の成長を促す魅力的な異文化体験プログラムの企画」「海外大学からの訪問団を受け入れるプログラム企画のシミュレーション」「頭・心・体で学ぶ研修作り（研修前・研修中・研修後のプロセスを踏みながら）」「海外短期研修の企画：学内交渉のロールプレイ」などである。

2017 年度の実践においては、参加者による評価（質問紙 58 件、聞き取り 12 件）をもとに、本研修参加者がどのような知見を得たのか、また、どのように実践にいかそうとしているのか検証した。分析の結果、ワークショップに対する満足度は、「大変満足」と「満足」を合わせて 100%となっており、プログラムに対する満足度が非常に高いことが明らかとなった。とりわけ、ワークショップを通して、モチベーションや実践力の向上実感が得られたとともに、仲間とのネットワーク構築による充足感が指摘された。その理由として、「今まで経験的に理解してきたことを理論的に理解することでその概念に『名前』を与えてもらえた」「ワークショップそのものが体験学習型・協働学習型で組まれており、実際に学習者が経験するであろうプロセスを実体験できた」「自分のプログラムには何が足りないかわかった」「学習者の異文化感受性レベルに応じたプログラム設計が重要であることが理解できた」といったことが挙げられている。

2017 年度～2019 年度の計７回にわたる実践・評価・検証を通して、本ワークショップを構成するモジュールのシリーズが完成している。これらをさらに普及させるべく今後も公開のワークショップを開催するとともに、内容を書籍化し、国際教育に携わる人々の自主学習教材として出版すべく、準備を進めているところである。

第二に、大学・高校の国際教育実践現場における課題・ニーズに関する調査・分析を行った。前述のワークショップ参加者を対象に、「各自の国際教育実践現場において課題と感じている点は何か」を問いとする質問紙調査を行い、73 件の回答を得た。得られたデータに対してテーマ分析を行った結果、「異文化教育・海外に対する興味不足など学生に起因する問題」「制度や環境設定・授業内容や評価といったプログラム運営に関わる問題」「教員のスキルや意識の問題」「言語とコミュニケーション力の問題」「文化や価値観の受容に関わる問題」の 5 つのカテゴリーが浮上した。また、これらの結果分析から、今後の国際教育実践現場の支援ニーズに関わって、5 つの論点が導き出された。

(1) 環境的要因：国際教育推進の意欲があっても、周りの理解が組織的に得られない。また、国際教育について学ぶ機会が少ない。
(2) 国際教育の指導方法と評価：具体的な方法論が確立されていない。実践現場によって、捉え方や対応がまちまちである。実践者の力量によって、学びの質に大きな差が出る。
(3) 教育実践者の知識・スキル・異文化感受性向上の必要性：より効果的な実践のためには、教育実践者自ら異文化感受性を継続的に育み、多様な文化的背景に関する知識に加え、自文化や内なる多様性にも目を向けることが必要である。
(4) 学習者の動機づけとしての異文化教育への関心：学習者の異文化に対する興味関心が薄く、実体験から学ぶ意義を理解させ、動機付けを行うことが必要である。
(5) 語学と国際教育の関係：教職員・学生ともに、「国際化＝英語」と捉える傾向がある。言語学習と異文化感受性の促進を関連づけた指導方針や教育的枠組みが確立されていない。

これらの結果について、ワークショップ設計の参考とするとともに、AP Conference （2018 年 12 月・英語）および異文化間教育学会（2019 年 6 月。日本語）において発表し、参加者からのフィードバックを得た。同内容での英語での論文を執筆・投稿したが、現時点では採択されていない。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計15件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 カンダボダ P.B、石川涼子、筆内美砂、村山かなえ、羽谷沙織	４．巻 20
２．論文標題 実践レポート：大学内における学生の正課外活動への支援体制と課題―BBPでの実践を題材に―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 立命館高等教育研究	６．最初と最後の頁 115-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田中京子・髙木ひとみ・酒井崇・和田尚子・川平英里	４．巻 6
２．論文標題 多文化間アドバイジング・カウンセリングと連携:共修時代の国際学生支援	５．発行年 2019年
３．雑誌名 名古屋大学国際教育交流センター紀要	６．最初と最後の頁 95-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Akiba, H., Yonezawa, Y., & Suematsu, K.	４．巻 1
２．論文標題 Bringing the world to the Japanese classroom	５．発行年 2019年
３．雑誌名 EAIE Spring Forum	６．最初と最後の頁 16-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Emiko Katsu and Miki Horie	４．巻 2
２．論文標題 International Students' Recruitment in Japan	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Internationalization of Higher Education: A Handbook	６．最初と最後の頁 95-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川平英里・星野晶成	４．巻 89
２．論文標題 国際教育従事者の人材育成とネットワーク構築：BRIDGE Instituteの取組と挑戦	５．発行年 2018年
３．雑誌名 JASSO ウェブマガジン『留学交流』	６．最初と最後の頁 34-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤井基貴	４．巻 2
２．論文標題 p4cで探究の教室を開こう	５．発行年 2018年
３．雑誌名 教室の窓	６．最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 藤井基貴	４．巻 62
２．論文標題 「考え、議論する道徳」の実現に向けて	５．発行年 2018年
３．雑誌名 楷樹	６．最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 藤井基貴	４．巻 -
２．論文標題 教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想	５．発行年 2018年
３．雑誌名 横須賀薫監修『概説　教職課程コアカリキュラム』ジダイ社	６．最初と最後の頁 23-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤井基貴	4．巻 337
2．論文標題 「現代的な課題」を取り上げた道徳科の教材・授業開発―防災を題材とした「主体的・対話的で深い学び」の実践―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本道徳教育学会編『道徳と教育』	6．最初と最後の頁 109-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤井基貴	4．巻 727
2．論文標題 静岡県の道徳授業	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『道徳教育』	6．最初と最後の頁 86-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Emiko Yukawa & Miki Horie	4．巻 18
2．論文標題 Local Students’ Views of English-Medium Courses in a Japanese Context	5．発行年 2018年
3．雑誌名 立命館高等教育研究	6．最初と最後の頁 93-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 近藤祐一	4．巻 18
2．論文標題 立命館アジア太平洋大学の『グローバル・ラーニング』	5．発行年 2018年
3．雑誌名 立命館高等教育研究	6．最初と最後の頁 17-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 秋庭裕子、新見有紀子、太田浩、横田雅弘	4．巻 74
2．論文標題 学部レベルの海外留学経験がキャリアにもたらすインパクト-学位取得目的、単位取得目的留学者と留学未経験者に対するオンライン調査結果の比較より-	5．発行年 2017年
3．雑誌名 留学交流	6．最初と最後の頁 14-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大瀧綾乃、中村美智太郎、藤井基貴	4．巻 28
2．論文標題 教員のICT活用指導力の向上に関する一考察 外国語教育におけるE-ラーニング導入の課題と可能性	5．発行年 2018年
3．雑誌名 静岡大学教育実践総合センター紀要	6．最初と最後の頁 58-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤井基貴	4．巻 1
2．論文標題 心情円を使った道徳授業	5．発行年 2018年
3．雑誌名 道徳用語と授業	6．最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計20件（うち招待講演　4件／うち国際学会　10件）

1．発表者名 堀江未来・秋庭裕子・高木ひとみ・筆内美砂・平井達也
2．発表標題 『異文化体験から学ぶ』教育実践の質向上を目指してー国際教育ファシリテーター育成の現状と展望ー
3．学会等名 異文化間教育学会
4．発表年 2019年

１．発表者名 Darla Deardorff、太田浩、澤谷敏行、堀江未来、アンジー・リー
２．発表標題 国際教育におけるプロフェッショナリズム
３．学会等名 国際教育夏季研究大会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 堀江未来・星野晶成・川平英里
２．発表標題 異文化体験を通した学びの場作りー海外留学プログラミングー
３．学会等名 国際教育夏季研究大会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 堀江未来
２．発表標題 成長する海外留学プログラム：学びの質向上を目指して
３．学会等名 CIEE教育者セミナー（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Suematsu, K., Akiba, H., Yonezawa, Y., & Hirai, T
２．発表標題 Going beyond campus: Comprehensive internationalization with local and business communities
３．学会等名 AIEA Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Coelen, R., Tran, L., & Akiba, H.
２．発表標題 Encompassing multiple voices: a comparison of study abroad trends and practices across Australia, Europe and Japan
３．学会等名 EAIE Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 星野晶成，山本甫，小幡浩司，坂本友香
２．発表標題 協定校開拓の現場―過去・現在・未来―
３．学会等名 国際教育夏季研究大会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 M. Horie, A. Hoshino, K. Rikimaru, C. Koda, J. Okada, & T. Hirai
２．発表標題 Quality over quantity: Professional development for internationalizing Japanese universities and high schools.
３．学会等名 16th Asia Pacific Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 M. Horie, Y. Chung, C. Yu, & W. Ruenglertpanyakul
２．発表標題 Nurturing our youth for sustainable future
３．学会等名 Thailand International Science Fair（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 M. Fujii
２．発表標題 Moral Education in Japan: Reform and Possibilities
３．学会等名 Hokkaido Moral Education Seminar（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 藤井基貴・高林真衣
２．発表標題 静岡県における教師の働き方に関する考察－A市におけるアンケート調査の分析から
３．学会等名 中部教育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 K. Suematsu, H. Akiba & Y. Yonezawa.
２．発表標題 Bringing out the Best in Faculty: Enhancing Intercultural Interaction and Learning in the Classroom.
３．学会等名 AIEA Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 筆内美砂
２．発表標題 海外派遣留学プログラムを通して育む異文化理解：異文化理解の解釈の再考と学びの可能性
３．学会等名 異文化間教育学会第39回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 筆内美砂
２．発表標題 多文化間共修Cross Cultural Encountersの教育実践―他者との出会いから創造する学び、二言語アプローチの意義―
３．学会等名 第24回FDフォーラム「大学におけるダイバーシティ」
４．発表年 2019年

１．発表者名 筆内美砂
２．発表標題 海外派遣留学プログラムを通して育む異文化理解：異文化理解の解釈の再考と振り返りを促す意義について
３．学会等名 名古屋大学国際教育交流センター主催研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 堀江未来
２．発表標題 異文化体験を通じた学びと異文化感受性の発達
３．学会等名 第4回教学実践フォーラム「留学を通した学び－支援及びアセスメント－」
４．発表年 2018年

１．発表者名 堀江未来
２．発表標題 日本の大学における国際共修の取り組みとその展開：異文化間教育の視点から
３．学会等名 異文化間教育学会第38回大会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 湯川笑子・堀江未来
２．発表標題 大学英語科目開講（EMI）における多言語使用
３．学会等名 異文化間教育学会第38回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 近藤祐一
２．発表標題 グローバルラーニングを根幹とした一般教育ーカリキュラムとAoL
３．学会等名 九州地区大学教育研究協議会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Hiroko Akiba & Robin Sakamoto
２．発表標題 Building Intercultural Competence through the MEXT Global Human Resources Development Program
３．学会等名 SIETAR USA the 17th Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 末松和子、秋庭裕子、米澤由香子（編）	４．発行年 2019年
２．出版社 東信堂	５．総ページ数 314
３．書名 国際共修：文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ	

１．著者名 横田 雅弘，太田 浩，新見 有紀子，花田 真吾，渡部 由紀，秋庭 裕子，小林 明，米澤 彰純 ，新田 功 ，河村 基，黒田 一雄，貝沼 知徳，芦沢 真五	４．発行年 2018年
２．出版社 学文社	５．総ページ数 291
３．書名 海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト：大規模調査による留学の効果測定	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	秋庭　裕子 (Akiba Hiroko) (10313826)	一橋大学・大学院経営管理研究科・講師 (12613)	
研究分担者	近藤　祐一 (Kondo Yuichi) (80178433)	立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授 (37503)	
研究分担者	高木　ひとみ (Takaki Hitomi) (90420364)	名古屋大学・国際機構・特任准教授 (13901)	
研究分担者	平井　達也 (Hirai Tatsuya) (80389238)	立命館アジア太平洋大学・教育開発・学修支援センター・教授 (37503)	
研究分担者	藤井　基貴 (Fujii Motoki) (80512532)	静岡大学・教育学部・准教授 (13801)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	筆内　美砂 (Fudeuchi Misa) (60362208)	立命館大学・国際教育推進機構・嘱託講師 (34315)	
研究分担者	星野　晶成 (Hoshino Akinari) (40647228)	名古屋大学・国際機構・講師 (13901)	
研究協力者	岡田　二朗 (Okada Jiro)		
研究協力者	大野　さゆり (Ono Sayuri)		
研究協力者	小野　詩紀子 (Ono Shikiko)		
研究協力者	川平　英里 (Kabira Eri)		
研究協力者	国府田　真 (Koda Chika)		
研究協力者	古賀　恵美 (Koga Emi)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	小島　直子 (Kojima Naoko)		
研究協力者	佐間野　有希子 (Samano Yukiko)		
研究協力者	松本　哲彦 (Matsumoto Yoshihiko)		
研究協力者	力丸　晃也 (Rikimaru Koya)		